

経営の「こころ」を尋ねる 第4回

93歳、現役 「世界のシンコー」を築いた人



筒井 数三氏
シンコー名誉会長

広島高等工業学校(現・広島大工学部)卒。1947年、新興金属工業所(現・シンコー)に入社し、取締役工場長に就任。副社長、社長、会長を経て、現在に至る。83年藍綬褒章、90年勲四等瑞宝章、2004年ブラジル政府リオ・プランコ国家勲章を受章。1919年8月1日生まれ、広島市出身。

永続する企業、伸び続ける企業の経営には職人的な勘所がある。月1回連載でインタビュー。ユア一生来千鶴が、経営の「こころ」を尋ねる。

「なせばなる」
やり遂げる根性が、未来を開いた

筒井会長は2代目。終戦後ベトナムから広島に帰り、創業者である筒井留三氏の長女と結婚し、後継者となった。

当時の新興金属工業所(現・シンコー)は、原爆で倒れた木造の建物を木で支え、従業員は30人程度という小さな町工場。給料の代わりにアルミの鍋を現物支給したこともあるという。

「情けない思いがした」

と、筒井会長。その当時に製造していたのは、戦時標準船のポンプ。レシプロ式(往復動)の簡単なものだった。しかし、知人を頼りに大手造船会社に掛け合って受注したのは、蒸気ポンプの製造。造った実績は無かった。

「なせばなる」

なせばなるぬ何事も
ならぬは人のなせぬなりけり

恩師から教えられた言葉を胸に、とにかく前へ進んだ。

蒸気ポンプ開発のためには、ボイラーを自前で整備せねばならなかったが、これがなかなか手に入らな



立形カーゴオイルポンプ
& 駆動蒸気タービン

たものの、工場を見てからは、なしのつぶてで全く相手にされなかった。週末ならば自力でやるしかない。週末に夜行列車で出向いて技術面の教えを請い、何とか自分たちで蒸気タービンを開発。小型のものから始めて、59年にはカーゴポンプ用の蒸気タービンを完成させた。

当時、世界の名だたる海運会社が日本に船を造っていた。各社の日本駐在員などを通じて、当社のカーゴポンプ&タービンのセールスを行うも採用されない。

「トップに直接交渉しなければダメだ」

ということ、63年に欧米の船主を訪問。アフターサービスなどの要望にこたえるため翌年、イギリス・ロンドンとアメリカ・ニューヨークに駐在員事務所を開設した。

50年前のことである。

食事の時も、質問攻めにする 技術者としての探究心

先進的かつ卓越した行動力。その源となったものは何なのか。筒井会長に尋ねると、

「やりたかった」

と、ひと言。情熱をぶつけ、新しいことに挑戦し続ける、技術者らしい答えだった。

現在、シンコーの海外事務所は、オランダ・アムステルダム、タイ・バンコク、シンガポール、中国・上海にある。社長時代には、年に1〜2回は、2カ月間かけて海外を回ったという。

「食事の時にも質問攻めにするので、一緒に食べるのを嫌がられました(笑)」

と、筒井会長。適当になんてことはあり得ない。

(第3種郵便物認可)



社員を思いつから「その程度を超えた」社員研修

そんな筒井会長にも、苦い経験がある。

性能向上への探求に余念がなく、「大丈夫」というところまで、やり切る。その言葉には、御歳93歳とは思えない、力強さがある。

現在あるのは、冷水摩擦と4時に起きて勉学に励んだおかげ

「病は、健康をつくる」

と、筒井会長。お元気な今の姿からは想像できないが、子どもの頃は病弱で、月に何日も学校を休んでいたという。高等工業の1年の時、2学期の期末試験の朝に吐血して、2学年の1学期を休学。

「健康は、自分でつくるもの」と考え、冷水摩擦を始めた。以来、徴兵された4年間を除き、ずっと今も続けている。

また、恩師に

「努力は天才に勝る」

と教えられ、毎朝、4時に起きて勉強した。

「現在あるのは、そのおかげ。努力は、一生のもの」

筒井会長の言葉にうなずきつつも、しかし、そこまでの努力はなかなかできるものではないと、畏敬の念に駆られた。

社員を思いつから「その程度を超えた」社員研修

そんな筒井会長にも、苦い経験がある。

ある。オイルショックにより造船業が不況に陥った1977〜78年頃、約100人もの従業員の希望退職を募る事態となってしまったのだ。自分が不在中の事だった。

それまで、従業員には共に頑張ろうと伝え続けていた。大切に思う気持ちは嘘ではなかった。

「なんでそんなことに…」

と悔やまれてならなかったという。労働組合に責められ、随分と悩んだ。苦しかった。二度とこんなことにはしないと心に誓った。

現在、シンコーには、長くは勤続60年の人もおり、定年退職者を再雇用することもあるという。若い社員の離職率も低い。社員研修では、筒井会長自身が指導することもあり、

「自分の健康は自分でつくるもの」と教えている。新人社員研修では、岩国から萩までの132kmを4日間で歩くハードな研修も行う。

「えらいとか、なんとかというもんではない。程度が違う、程度が！」

命懸けですよ、と筒井会長。辛い研修だからこそ、やり切った時の達成感、ひとしお。皮肉なことに根性が据わる。雇うからには責任がある。そう思うからこそ、社員研修にも力が入る。

100歳以上、生きて社会のために尽くす

40年前、まだ注文も入っていないのに、液化天然ガス(LNG)の運転設備を造った。LNGは空気を汚さない。世の中のためになるなら、

「それじゃ、やっつたらか」と思ったという。技術屋で経営者であるからこそその気概が、そうさせた。そんな筒井会長の功績は数多く、

「社会のために尽くすことが、使命」と、奉仕活動にも積極的に取り組んでいる。15年前には、所属するロータークラブで2500万円を募り、インドネシアのバリ島に婦人病



(第3種郵便物認可)

「率先垂範」
言ったからにはやらすにおけない。現在も、朝5時10分には、ひげをそり、真つ裸になって冷水摩擦をし、散歩に出掛ける。ゴルフは、気候のよいシーズンなら月に2回はする。「100歳以上、生きてみたい。現役で」

と、筒井会長。

人並み外れた、気の強さが、必ずそれを現実に導くと、私には思われた。そして100歳どころかもつと長く、ここ広島で世界とつながる活動を成し続けていたきたい、そう願う。



「インタビュー」牛来 千鶴

ソアラサービス社長。人肌感覚のクリエイティブ共同オフィス「ソアラビジネスポート」を運営。「広島に、あったらいいな」をカタチに「を理念に掲げ、地場企業とのコラボレーション商品開発や人材育成など、地域を元気にするプロジェクトを推進している。